

Kappa Novels



お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけますしたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三

(郵便番号112)

光文社 出版局

長編推理小説 幻の近江京^{おうみきょう}

昭和49年6月15日 初版発行

昭和49年7月15日 15版発行

著者 邦 光 史 郎^{くにみつしろう}
京都市左京区北白川東伊織町
25-1

発行者 五十嵐 勝 彌

印刷者 堀 内 文 治 郎
東京都千代田区三崎町2-18-11
堀内印刷

発行所 東京都文京区音羽2 株式会社 光文社
振替東京115347 電話 東京(942)2241(代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。(ナショナル製本)
表紙の模様・意匠登録 116613 © Sirō Kunimitsu 1974

(分)0-2-93(製)02249(出)2271 (0)

まぼろし お う み きょう
幻の近江京
「天平の挽歌」改題

くに みつ し ろう
邦光史郎

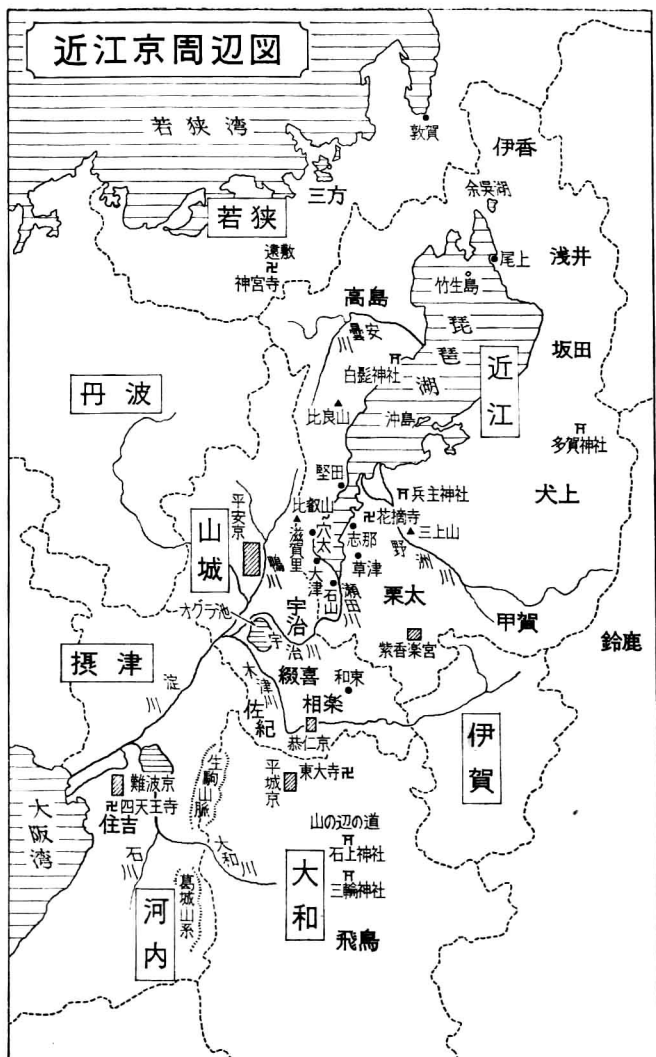


カッパ・ノベルス

目次

石たちは語る	271
敗者の歴史	239
野守は見ずや	210
リストは何を語ったか	183
他人の事件	154
暗黒と透明	125
お水取り	93
空白の部分	61
偶然の連続	35
まぼろしの寺	5

近江京周辺図



幻まぼろしの寺

1

それは全くの俄仕込みだったし、今さらあわてて古寺めぐりをしてみたってしょうがないのである。けれどやはりわずかな時間を利用して法華寺へきてしまったのは、いわば一種の気分づくりだった。

それになんとかしてこのざわついた気持ちを鎮めたい。小寺美也は、以前から一度訪ねたいと思っていた、あの法華寺へ足を運んで、まるで行きどまりのような門前にたどりついたとき、不思議なことに、ずっと不安が退いた。べつだん目をみはるほど壮麗な建物があるわけでなく、威厳にみちた法権を抱え込んでいるというのでもないさやかな寺院、その小路に面した築地塀に、冬陽が静かな光を投げかけていて、なんだか靴音が際立って聞こえるほどひっそりとしていた。

小ちんまりとした屋根門をぐぐり抜けると、つい正面

に白っぽい塀がみえている。そして、左手にこれまたあまり宏大とはいえない一重屋根寄棟づくりの本堂がなだらかな芝生の庭に面してゆったりした表情をととのえている。

光明皇后が千人の垢をみずから落とそうとして設けられたという浴室は修理中で板囲いされていたため入れなかったけれど、東門をくぐって、ゆっくり本堂前へ歩んで行くと、境内は奇妙なほど明るく、しかも閑寂の氣にみちていて、この一角に時間が凍結されてしまったかのようだった。

美也は、本堂へ上るきざはしの下にそっと靴を揃えておいた。すると、足裏にひんやりとした木の冷えが伝わってくる。

それもすこしたつと、こちらの体温に暖められてくるほどの冷えであって、しかも木目の感触はなにやらくすぐたくて膚にやさしかった。

障子をそっと引き開けると、そこに受付が設けられていて、中年の尼僧がひっそりと控えていた。

——そうだった。ここは尼寺だったのだ。

だからこそこんなに全体が優美でえも言えぬやさしさをただよわせているのだと、自分のうかつさが恥じられ

た。

「拝観させていただきます……」

料金を差し出すと、尼僧は、

「よくいらっしゃいました……」

と静かに微笑を返した。

わずかな、なんでもないそのやりとりが奇妙に心に沁みてならなかったのは、旅情のなせる業だったろうか。

べつだん、尼僧は余分な対話を望んでもおらず、ただひっそりとおのが役目を果たすべく、お堂の片隅にじっと控えている。

けれど、そこに人がいて、はじめてこの建物が単なる遺構でなく、いきいきとした生活の場になっている、美也はそんな感慨を覚えた。

——このお寺は、いかめしい大寺のもつあの死んだ冷たさでなく、まだちゃんと人間のすみかだ、という生活の暖もりを残しているようだ……。

だから、本堂の須弥壇に近寄って散華のための菊の残り香に気がついたり、ひょいと覗き込んだ厨子の中にある名高い十一面観音像を発見して、思わずどきりとさせられたりした。

こんな無造作であっていいのだろうか、そう思わせる

ほど、その光明皇后をモデルとして刻んだ白檀一木作りの国宝は、ひっそりと厨子の内側におさめられている。

全長一メートルというからそう大きくはない。けれどもかすかな燈明の光を浴びて、きらりとその切れ長の瞳でこちらを見返している仏像は、生身の女人かと思わせるほどいきいきとしていた。

左手に宝瓶をもち、右手でちよいと天衣をつまんだ、まことに女性的な立像で、ふくよかなその肉づきはあまりにもなまなましい女を感じさせる。

そう思ってみるせいか、三個ならべて飾られた創建当時の仏頭まで、なにやらやさしい表情をたたえているようだった。

「どうですか、そうして眺めているとほしくありませんか……」

いきなりそんな声が聞こえてきて、美也はぎょっと立ちすくんでしまった。たしかにこうして仏像を目にしていると、つい手が伸びそうになる。だが、そんなことはたとえ思い浮かべるだけでもいけないことなのだ。

けれど、うっとりとして見とれている心の空隙をぐざりと突き刺すように、ほしくならないかと言い当てられてみると、なんだか美也は顔が火照ったばかりか、いたたま

れない気持ちにさせられた。

「もつともイミテーションでよければ、町で買うことだってできますがね……」

なんだ、馬鹿にしているわと憤慨する前に、美也はそれを聞いて、正直なところ、ほんと肩の荷が下りた。

仏像がほしくないかだなんて、そんなまなましいことを、この浄域でめったに口にしないでほしい。

なまじ手を伸ばせば国宝の十一面観音像にふれることのできる場所だっただけに、いっそう美也はあわてさせられた。

——憎い人だわ……。

どんな男かしら、と振り返ったけれど、そこにはもう人影がなく、三人づれの男たちが、いましもお堂を出て行くところだった。

その三人のならんだ真ん中の男がダークグリーンの子レーザを身につけていて、ひどく小粋な身ごなしをしていた。

——あの人だったのかしら……。

だが、行きずりのささいな出来事にかかわっている暇はなかった。美也は、それよりこれから大事な打ち合わせに出かけて行く途中だった。

2

窓ぎわのテーブルについて、ひとりで食事をとっているいかにも意地悪そうな顔つきの中年男、それがどうやら神原東洋であるらしい。

それに、ひとりで食事している男の姿は、誰をも寄せつけないほど孤独で、すさまじく、そして何やら物哀しくさえあった。

けれど、それにしても肝心の吉岡はどうしたのだろう。廃寺をたずねて写真を撮ってきてくれないかという話を持ち込んできた杉書院の編集者吉岡徳夫は、美也の父の教え子で、吉岡にしてみれば、いささか報恩の意味も含まれていたのだろう。でなくては、とても美也のような新人カメラマンに、単行本一冊分の仕事がすべて任せられるというようなケースはめったにないことだった。

ではお情けで起用されたのかとなると、それでは美也の立つ瀬がない。美也にしてみれば、やはりどこまでも自分の手腕が認められて、こうして仕事の場を与えられたのだと思いたいし、またそうでなければカメラマンですといって、こうしてのこの人前に出てこれない気持ちだった。

だがそれはともかく肝心の紹介者がいないことには話にならない。そこでどうしようかと入口近くで迷っていると、きらりと鋭い視線が投げかけられて、どうやらいち早く東洋は、美也の到着を知ってしまったらしい。

——いいわ。どうせ顔を合わせるんですもの……。

美也は、ガラス戸に映った自分の姿を、ちらとたしかめ、パンタロンスーツの上衣の裾をちょいとつまんで引き下げてから、さあ出陣という気分だった思い入力で、神原の席へと近づいていった。

すでに相手は、デザートのコーヒーを口に出している。それも、砂糖やミルクに一切手をつけず、ブラックのまま、ゆっくりすりすりつつ、上眼づかいにちらちらと近づいてくる美也を眺めやっていた。

ひとりでに美也は頬の硬張る思いをこらえかねた。

——なんて思いやりのない人なんだろう。

美也はこれまで、どちらかというと、いつも人からちやほやされることに慣れすぎていた。だからすこし冷たくされたり、自分の立場を尊重してくれない相手にぶつかったりすると、すぐ拒絶反応をひき起こして、自分の殻の中に引きこもりがちだった。

だからそんな子供っぽい真似は間違ってもするまい、

そう自らを戒めつつ、それでも美也はつい不機嫌になっていた。

「神原さんでいらっしやいますか……」

切り口上でテーブルわきに棒のようにつつ立っていた。

「そうだが、君はどなたかね……」

ややうつむき加減になってパイプに煙草を詰めていた神原は、ちらりと上脛をひき上げたばかりで全く相手になろうとしなかった。

「初めまして、私、小寺でございます……」

そう言えばすぐ相手が了解してくれるものとはかり信じ込んでいた。

だが東洋は素知らぬ顔つきで、相変わらずパイプにかり切っている。

気まずい沈黙の何秒かが流れていた。

陽が翳ったものとみえ、ホテルの中庭に寒々とした気配が立ちはじめた。

「ところで、何かご用なんですか……」

なんて白々しいことをと、美也は腹を立てた。

「私、写真家の小寺でございます」

「そう、そりやどうも……」

その取りつく島もない態度に、美也は唇をかみしめた。

そして危うく立ち去りかけたとき、あたふたと吉岡が駆け込んできた。

「やあすみません。十一時台の奈良行特急がないってんで、あわてましてね……」

だが呑気なこの編集者は、そこでやっと氣まずいこの場の雰囲気（ふんいき）に氣づいたようである。

「こりやどうもうっかりしておりましたが、神原先生、実はこの人なんです。こんどの写真をお願いしようと思っておりますのは……」

けれど、すでに凍りついてしまった両者の感情を解きほぐす努力をさらに彼は重ねる必要があった。

「そうだ、申しわけありません。それもまだ先生に申し上げておりませんでしたね。こちら小寺美也さんといって、近代ジャーナルの写真部に二年ほど勤めたうえで、目下独立して各社の仕事をしている新進写真家なんです。なかなか変わったアングルから写真を撮る人でして、こんどのような、建物も何もない廃寺めぐりには、ちょうどいいんじゃないかと、部長の推薦で、急にきまったものですから、万事こちらへきてからご了解を得ようと思っておりました。それが遅れちまって、どうにも恰好（かうこう）のつかないことになって、申しわけありません……」

根が横着なせいか、吉岡は、もうそれですんだとばかり、にやにやしながら、美也に席をすすめようとした。

「でも、まさか私、まだ何も神原さんに話していただい

てなかっただなんて、考えてもいませんでしたわ」
吉岡の怠慢（たいまん）を責めつつ、同時に自分の立場を説明しておくことにした。

だが、神原東洋は、そんな世間一般の氣づかいに全くなんの関心もないような顔つきでパイプをくゆらせつつけている。

「ところで、吉岡君、こちらのお嬢さん、すこしは古代の歴史を知ってらっしゃるんだらうか」

それはまことに不躰（ふてい）な質問であった。

「さあ、どうでしょう。美也さん、すこしは知ってるんだらう？ 高校で習った程度は……」

そこで美也は、あまりむきになるまいと、静かに微笑しておくだけにとどめておいた。だが、神原はそんな馴れ合いをすこしも許（ゆる）さうとしなかった。

「そりゃ困ったな。この際はつきり言いますが、僕は歴史隨筆（ずいひつ）を書いている男で、写真のことは全く知りません。だから、このお嬢さんの腕前（わぜん）については、何も申しあげ

中には、礎石すらないもの、あるいはどこかの工場に變貌してしまっているものが、ずいぶんある。そうなると、もしその寺のもつ歴史的な背景を全く知らなかったなら、写真の撮りようがないだろうと思うんだよ。つまりこの仕事は幻を追うことであって、現在の姿を撮ってるだけじゃ駄目だってことなんですよ。影も形もない、今はもう全く滅び去ってしまった過去の幻影、それを写真に再構成しなきゃならんのだからね……」

それを神原はどのような早口でまくし立てた。そして言うだけ言うと、またむつつりとパイプをくわえている。その気難しい横顔に、何やら途方にくれた様子がありありと滲み出ていて、美也は、おやつと目を疑った。

——ほんとは、もっと、やさしい人なのかもしれない……。

だが、これはあくまで仕事だった。仕事というものは、たとえその人が善良であろうがなからうが一切問いはしない。そして問われるのはよい仕事をしたかどうかという点だけだった。

——そうね、私はどうやら、あまりにも個人的な、それも女の感情を、仕事の場へ持ち込みすぎていたようだよ。下唇をかみしめて、美也は自分を恥じていた。

そんなはかなげな様子に気づいて、東洋はいっそう不安を覚えさせられたようだった。

しかし吉岡は、そうした両者の微妙な食い違いを、荒っぽい手つきで、至極大まかに縫い合わせていった。

「まあいいでしょう。僕もいっしょについて回るんですから……。でも、いっそのこと三人とも、東京を引き払って、こちらへしばらく住み込んだほうがいいかもしれませんね」

いかにも快濶（かいかつ）そうに吉岡は高声で笑っている。けれどその内側に何やら得体（たたい）の知れない何かがひそんでいるように美也はふと眉（まゆ）を曇らせた。

——以前はこんな人じゃなかった……。

たしかに、美也の記憶に残っている吉岡と、現在目の前にいる彼との間にはつながらない裂け目のような部分があるようだった。

3

神原は時として遠くをすかし見るような目つきをすることがある。そんなとき、彼の思いは、時間と空間を超えて、はるか古代へ飛んでいることが多かった。

悪い癖だ。ひよっとすると君は前世に、相思相愛の女

性を残してきているのかもしれないね、だからいつも古代へ帰りたくてうずうずしているんだらう。そこで四十になってもまだいっこうに結婚しようと思へん。こりやどうも、そういうことじゃないのかい」

古い友人である宮脇が、いつかそう言っていたことがある。

——なるほど、前世とはうまい考えだ……。

さすがロマンチストらしい考えだと、神原はすっかり感心させられた。しかし、前世や後生は限られた生命時間しか生きられない人間のはかない希望であり空想の所産であるにすぎず、神原の女性嫌いは、むしろ後天的なものだった。

——この目の前の若い美人には悪いけれど、どうも俺は、若い女といっしょに組んで仕事をする気にはなれないのだ……。

それをどう話せばわかってもらえるだろうかと、いささか憂鬱だった。それに、すでにきまっている写真の仕事で、かりに下ろされるようなことがあると、この女性は失望落胆して、どんなひどい精神状態にならないとも限らないのである。

——だから女性と組んでの仕事はご免なんだ。

これがもし男の場合なら、あくまでそのカメラマンの得手不得手とこちらの要望とが合うか合わないかが問題であって、組むか組まないかのポイントが実にすっきりしてくる。そして、それでもうじうじとこちらの決定を恨むような写真家がいたなら、それでもプロかと冷たく突き放してやることができる。

男は仕事に生き、女は愛情に生きている。

この鉄則があるかぎり、女性と仕事を共にしようとは思わなかった。

それより神原は、現在ある難題と取り組んでいる最中だった。それは大津京はどこかということ、これがわからないと、昨年から引きつづき抱え込んでいる『新日本風土記』のうち、近江の巻が書きにくくてしようがないからだった。

近江の国、今でいう滋賀県は、全面積の二十五パーセントが琵琶湖という変わった成り立ちをもっている。それにこの琵琶湖は、世界一古いバイカル湖やタンガニカ湖（アフリカ）につぐもので、その成立は、およそ二百万年前であるといわれている。（注・その他の日本の湖は、みなせいぜいで万年代、世界的にいっても百万年前の湖は珍しいものである）

そのためここにはめったに他所では見られない古生物が今も棲息している。そのうえ、竹生島付近には湖底遺跡（葛籠尾崎）があつて、水深六十メートルもある湖底から漁師の網にかかつて浮かび上がつてきた縄文土器が次々に引き揚げられるなど、謎が多い。

またこの近江の国は、京都や奈良について古文化財の多い所、全県遺跡と古社寺と古墳に覆われているといつてもよいくらいであるのに、いっこうに世の脚光を浴びたことがなく、いわば歴史の真空地帯、忘れられた古代の王国であるといつてよい。

そして、古代史を繙くと、この国に、保良の宮、穴穂の宮、大津の宮、紫香楽の宮などといった王都のあつたことが記されているけれど、現在その位置をほぼ確かめられてゐるのは紫香楽宮跡だけであつて、他の三京については諸説あつて、いまだにこれという決め手を欠いている。

大津の宮は、西暦六六八年、かの有名な大化の改新の推進者である天智天皇によつて開かれ、そこには、大海人皇子（後の天武天皇）と大友皇子、あるいは女流歌人であつて艶名を謳われた額田王女などの才子佳人が相集つて彩りを添え、あるいは大織冠藤原鎌足が登場するなど、

まことに華やかな王朝絵巻が繰り展げられた所で、大陸文化の華開いた玉殿高樓が建ち並んでいたはずなのだ。ところが、その宮跡が、いまだにはっきりしない。

つまり、これまで大津京の址だといつて掘り出された礎石や瓦などは、単なる寺跡にすぎなくて、本当の大津京はもっと別の場所にあるのかもしれないのである。幻の大津京。天智天皇の大津京が幻であるばかりか、ここには、古代文化の華咲いた繁榮の跡が各所にあつて、大和王朝とたえず姻戚關係を結んでいた近江王朝の存在が推測されている。つまり幻の近江王朝である。

—— いったい、近江の国に隠され、秘められた古代史の真相というのは何なのだろう。

記紀（古事記と日本書紀）の言い伝えによると、天上に神々の集う高天原という幻想の国があつて、天照大神や須佐之男命、あるいは伊邪那岐、伊邪那美命などはみなその国の住人で、神々の約束の地である大八洲（日本列島）へ降臨したことになるが、この高天原は、近江の国ではなからうかと考える人たちがいる。その説によると、神々の会議の場となつた安河こそ、近江の国の野洲川であるというが、そんな伝承は果たして本當なのだろうか。

またなぜこの近江には、故宮が多く、しかも神々の国とされているのだろうか。

近江は日本の臍（中心）であり、四つ辻であつて、およそ日本の文化にしてこの国を通過せざるものなしとまで言われた交通の要衝である。

そしてまたここは、秘められた遺跡遺物の宝庫であり、中には石山の貝塚のように早期縄文期の遺跡があつたりする。

そんなことが、神原の脳裏を駆けめぐつて、『幻の寺』というイメージに、ふと重なり合つた。

——そうだ。幻の寺という観点から、近江の国に秘められた古代史の謎を見直し、追求して行くという方法があるじゃないか。うん、これはたしかにいけそうだ……。それなら、吉岡の持ち込んできた『幻の寺』紀行はけつして無駄にはならないどころか、かえつて何らかの示唆を与えてくれるかもしれないのである。

「たしか、君が送つてくれたリストの中に、崇福寺が入つていたね」

神原は、長い指先を、まるで予言者か何かのように、くるくる回したり、あるいはうごめかしたりする癖をもつていた。

そしてたいがいの男や女は、その妖し気なフィング・アクションに、ふと惹き込まれて、身構えや虚飾のない生の自分をさらけ出してしまふ。

何気なく、神原は指先をうごめかしつつ、自分の半分ほどしか人生体験をもっていない、このあまりにも初々しい女性の瞳の中をつい覗き込もうとした。

——おや!? この人は虚無をしかたたえていない。

無だと感じたとたん、あべこべに神原は、小寺美也のほうへ引き込まれそうになって、いささか狼狽した。

——冗談じゃない。俺の女嫌いは単なる看板じゃないはずだ……。

彼はわずかに破綻を食いとめた。

4

「崇福寺ってのは、たしか大津京鎮護の寺でしたね。そうそう南滋賀麿寺とも言つたんでしょ……」

吉岡は、神原の右手の動きにすっかり魅せられてしまつたように、まばたき一つしようとしなかった。

「そう、さすがによく知っているね。しかし、崇福寺が大津京鎮護の寺だったかどうかはよくわからん、それに崇福寺と南滋賀町の麿寺とは、別物なんだよ、残念なが

ら……」

「そうでしたっけ……」

「崇福寺は、天智天皇が靈夢によって、都の西北へ人をやってたずねさせたところ果たせるかな老翁がいて、こここそ靈地であると教えたので、天智天皇の七年正月を卜してここに寺を建てたという記事が扶桑略記に出てくる。けれど一説によると、はじめのころはもっと南の長等山付近だったというんだね。だからどうもこの辺が難しいところなんだよ」

だが、その難しさは、大津京を割り出す手がかりになるか否かという点にかかっていて、吉岡の持ち込んできた仕事とくらべると、だいぶポイントが違っていた。

「それに、比叡山麓は、北から数えて、中村廃寺（真野町）、衣川廃寺（堅田広川町）、穴太廃寺（穴太町）、崇福寺（滋賀里）南滋賀廃寺、膳所廃寺（西ノ庄）というようにざっと数えてもこれだけ幻の寺を抱え込んでいる……」

「でもそのうち有名なのは崇福寺だけでしょう……」

「いいや、穴太廃寺は成務天皇の穴太の宮に関係ありといわれているし、中村、衣川の両廃寺は、この付近では一番古い」

「だけど、そういう具合に一つ一つ取り上げて行くとキ

リがありませんからね。とにかく近江の国ってのは、多いですね、幻の寺が……」

「そこで代表的なものだけを選んでんだらう？」

「まあそうですね。そりゃいろいろご不満もありでしょうが、そのところは一つ勘弁ください」

「しかし、どうしても都合の悪いものや不適当なものがあつた場合は、差しかえてもらうよ」

「そりゃもう、ところで滋賀県の廃寺ってのは、白鳳時代から天平時代に創建されたものが多いですね」

「それだよ、それがどうも古代史の大きな謎にかかわってくるように思えてならんのだよ」

「白鳳・天平の古寺がですか」

「そう、ふつう天平の文化というと、十人のうち九人まで、いや九十九パーセントまで奈良の寺に遺された仏像や美術品のことだと思ひ込んでしまっている。ところが、それだけじゃない、隠された白鳳・天平の美は、近江にあるんだな。ところが、誰一人として、この事実を口にしようとしなない。そりゃ奈良のほうか歴史の舞台として重要だったろうし、残っているものもたしかに多い。しかし近江にはたいへん謎の部分があるんだな。僕はそれを掘り起こして、いままで天平の美の中で欠けていた部

分を明らかにしたい。いや、天平の美の原型が、むしろこちらにあるんじゃないかとすら思っているんだよ」

とうとう神原は、青年のような熱情を吐露してしまった。

美也は、そんな神原を何か眩しいものでも仰ぎ見るようにしていた。

そして吉岡もすっかり昂奮したように、

「なるほど、そうすることによって、天平の挽歌を奏でたい。そりゃいいですね、それで幻の寺の主題がはつきりましたよ……」

と、自分の領域へ神原の熱情を引き込もうとした。

だがそうなると、神原はすぐ現実に戻ってしまった。

「まあそれは別として、ここでこうして駄弁っているより、この近くにある廃寺を、どこでもいいから一つ回ってみよう。そうすりゃ、こちらのお嬢さんの参考にもなるだろう」

神原はせっかく奈良という古代文化の宝庫にきていながら、こんな喫茶室にじっとしていることはないと思っ

た。

「そりゃそうですね、どこにしましょう」

「吉岡君、それより、そちらのお嬢さんのご希望は……」

そこで美也の出番がまことに不本意ながらやっと回ってきた。

「でも、とても私なんかの出る幕じゃないような気がするんですけど、ねえ吉岡さん、ほんとに私の写真でいいですか」

それは男たちに対する最初で最後の抵抗だった。

けれど、美也の欲した神原の答えを引き出す以前に、

すべてを吉岡が引きかぶってしまった。

「おいおい小寺さん、何をいってるんだい、もう船は港を出ちまってるんだよ。それよりやはり行く先はリストの中から選んでいただくとして、この近くだと、どこがいいでしょうね……」

地図と首っ引きで、吉岡は、すこしでも早くこの気難しい書き手とあまりにも頼りない写真家の一組を、仕事のペースに引き込みたいと必死だった。

やがて、彼らは奈良県庁の近くで車を拾って佐紀へと向かった。

「佐紀にむかし超昇寺という寺があつてね、これは平城天皇の皇太子で高丘親王という人が創められたものなんです。この親王は空海のお弟子さんだったといわれています。ところが仏門に入っただけでは物足りないという